

会 議 録

会 議 名	第8回 第2次小金井市芸術文化振興計画策定委員会		
事 務 局	市民部 コミュニティ文化課		
開 催 日 時	令和2年8月26日(水) 午後3時 - 午後5時		
開 催 場 所	オンライン会議ツール zoom を使った開催		
出 席 委 員	大澤寅雄 委員長 伊藤裕夫 副委員長 小林勉 委員 水津由紀 委員 野澤佐知子 委員 福沢政雄 委員 桑谷哲男 委員 戸舘正史 委員 西村徳行 委員		
欠 席 委 員	小林真理 委員 山村仁志 委員		
事 務 局 員	1 事務局運営補助 特定非営利活動法人S Tスポット横浜 小川智紀、田中真実、荒田詩乃 2 小金井市 コミュニティ文化課長 鈴木遵矢 コミュニティ文化課専任主査 吉川まほろ コミュニティ文化課主任 津端友佳理 コミュニティ文化課主事 小野智広 3 事業実施者 特定非営利活動法人アートフル・アクション 宮下美穂		
傍 聴 の 可 否	可		
傍聴不可・一部不可 の場合は、その理由	可	傍聴者数	0人
会 議 次 第	1. 計画の構成について ー構成案をもとに議論を行う 2. その他 今後の進め方について 意見交換等		
会 議 結 果	別紙のとおり		
会 議 要 旨	別紙のとおり		
提 出 資 料	・小金井計画構成案		

(開会)

1. 計画の構成について

－構成案をもとに議論を行う

【大澤委員長】本日は、計画の構成案について議論を行います。明日は、計画の策定に向けて草稿作成を行います。草稿の成文化の作業は事務局がはじめています。作業の過程の中で見つかった、前後の関係や掘り下げが穴埋めが必要なんじゃないかというところを中心に議論していきたいと思います。

【事務局・小川】これまで皆さんからさまざまなご意見をいただきました。事務局から、成文化していく中で特にここの議論を進めてほしい部分などをご説明します。第二章で、市民自治は、文化を伝えていく・広めていく・深めていくために必要という部分で、担い手、一般市民をどう考えるのかというところですね。学校との連携、学芸員（芸術専門職）、具体的にはホールや美術館だったり、専門職の人がやるべきことは何かということを書ければと思っています。また、面的変化、時間的变化で、この先の公共性の問題、活用方法や交流方法、評価のことを触れていくつもりで、みなさんからいただいた意見をパッチワークしながら何とかつなげています。次に、市民自治を道具にするという点、市民協働の大前提のところですね。イベントが決まったから参加するのではなく、立案の段階から参加するのが大事という意見がありました。また、教育のところでは、学び合いのスタイル、つまり教える－教えられるという古い学校のスタイルではなく、教育分野で取り組んでいる人たちと目標を共有してトライ・アンド・エラーをやってみようということが出てきました。つなぎ手の領域横断の部分では、教育と文化だけじゃなく領域横断をしてつなぎ手を作っていくことが大事で、教育の成果を学校外教育へ応用していくということも出ていました。社会包摂の基本にあるのは、文化の権利の話です。文化的生存権、文化の権利が重要だという意見も出てきました。また、地域には、多様な人たちの存在があり、ただ包摂すればいいのではなくアイデンティティの理解が必要であるというお話がありました。また、包摂の取り組みを行う上で、施設だけで包摂するのではなく、施設外での取り組みが大事というの、ここまでの提案から出てきたところかなと思います。

これらの、市民協働、社会包摂、教育、に関して、市民自治を縦軸を取ったらどうなるのか議論いただければと思います。例えば、包摂をする場合に、外国の人たちとワークショップをやりますとか、協働という時に、立案段階から関わる美術講座をやったらいといういい方もあるかもしれない。計画では、書くとかやらなきゃならない、けど書いたらできるという側面もあるんです。具体的にイベントでも大丈夫ですし、アクションに繋がる案をいくつかみなさんの方で出していただければと思います。付箋で貼って整理をしながら進められればと思います。

【大澤委員長】計画についての構造と同時に、話の進め方自体をあらためてご説明します。左側の方の、協働・教育・包摂は3つの大きな柱です。市民自治を道具として考えた時に、第1章で書かれたことから、協働を実現するために、市民意識を変えるためには何をすればいいのか、教育や包摂についてもそれぞれ市民自治のもとに行わ

れるべきアクション、それぞれの主体が何をすればいいのかを計画としてどこまでうたうのかを議論できればと思います。計画は書くとそれを実行するということがあるので、追及を受ける事にもなりますし、非現実的なことを書くわけにもいかない、けれど理念だけだと絵に描いたモチにしかならない。10年間の計画、こういうことをやっていくということを膨らませたいと思います。議論のとっかかりが難しいかもしれませんが、専門家の意見を聞いてみたいです。

【伊藤委員】難しいですね。アクションレベルのことをどれだけ含むのか、その大前提を語らないといけません。他の自治体では、重点施策ということでここまでやるというのを数本上げて、すでに取り組んでいる活動の継続を前提に、重点施策なるものを書きます。ここまでの議論では、協働・教育・包摂を加えることになると思うんですが、僕としては、一番右側のところに書かれているものが、実施計画に近い柱だと思っているんです。それらを計画の柱にするのか、議論の方向が見えていない気がしています。

【大澤委員長】議論の方向性が同じ方向に向けるようにしていきたいんですが、西村先生からも議論の方向性のご意見はありますか。

【西村委員】私の方も、いま伊藤委員のお話を伺いながら、前回お休みした分を取り戻そうと、頭を回しているんですが、ここからお話は、具体的な事を示していった方がいいのか、スローガンのようなものを示していくのがいいのか。具体的な事は後からの方がいいのかなという気がします、ここで縦軸と横軸を考えると、さらなるキーワードをいくつか見つけていく方がいいのかなと思っておりました。教育という中で書かれている事は大きく飛躍するところではなく、継続できる部分を考えてみたいと思っています。

【事務局・小川】私からも聞いてもいいですか？ 学校の取り組みは、どうやって実施しているのでしょうか。

【オブザーバー・宮下】今年でいえば2校の計画をしていて、材料をどうしようか議論をしているところでし。学び合い、目標共有、トライ・アンド・エラー、領域横断みたいな意味では、今朝もさんざんやり取りをしました。それがどういうチャレンジでどういう成果が出ているのかについて、一言ではなかなかいえません。今年は図工の授業ですが、去年はプログラミングの授業もやっています。学校関連でいくと、プログラムの授業は相談しながら進めています。議論としては学びあいのスタイルってところに近いんですが、アーティストの役割とは何か、中間的に学校とアーティストの間に入ってプログラムをやる役割は何なのかってことが問題になっています。社会包摂とか、参加とか市民の担い手に関わるんですけど、中間的にマネジメントする人は市民なのでお互いに学びつつ、苦しみながらやっているところがあって、その蓄積による部分がかかなり大きいんです。教育分野で学校以外の主体と連携したことは、アートフル・アクションが障害がある方の施設で造形活動のお手伝いをしていて、その成果を施設と市民の人が連携して展示をするみたいなこともやってきました。

【大澤委員長】具体的なもの、あとでそれをここまで書くと、ここまで書くのはとどめておこうという判断で、なのであまり現実から飛躍をしないで、市民意識を変えるために文化芸術で何が可能なんだろう。担い手としての市民は何ができるんだろうというアイデアを盛り込んでいければと思っています。

【戸館委員】協働、教育、包摂のためには、自治の担い手は何をすればよいか、何を目指していけばいいか。市民自治って言葉が共有されているように思えて、もしかしたら共有できていないんじゃないかと思ったりします。現行の教育の中で市民自治がどういう風に立ち上がったか、具体例もあると議論しやすいんじゃないでしょうか。

【大澤委員長】戸館さんの関わってきたプロジェクトで、こういうことに関わってきた経験はありますか。

【戸館委員】アートフル・アクション全体の事業すべてに言えることだと思うんですが、ガイドラインがはっきりしてなかったり、方法論が明確じゃなかったり、宮下さんのまわりに集まってくる人たちもそういう思考のアーティストが多かったりすると思います。かつて武蔵野や三鷹、国立で、協働でやった参加型のワークショップ・プログラムがあって、そこでは不安の声しか聞こえない状況でした。結果的にそれが良い方向に作用していったということ、だけどそれはとても面倒くさいことだと思うんですね。でもそれが豊かなことであるってことをどうやって計画の中で、具体的な理念なり、アクションプランなりに成文化できるのかは悩ましいなって気がしています。難しい議論をしているなって気がします。市民自治とは何なのかを共有したらいい気がしています。

【伊藤委員】ちょっと、抽象的な議論になっているんですが、再度確認しておきたいんですが、協働・教育・包摂はこの計画の目的ではないと思うんですね。小金井らしさを考えるときに留意することなので、ここから無理やりに事業を引き出すのは無理で、進めると文化振興計画ではなくなっていくと思います。市民自治も計画の目指すものではないですよ。さまざまな活動が行われてきた結果として市民自治が広がっていくというものです。ここから発想するとどんどん話が抽象化して、分からなくなると思います。

現行の計画をざっと見ていました。今の計画の第3章に「重点的に取り組む施策」というのがあって「市民と芸術文化をつなぐ芸術文化振興の担い手の育成」があり、担い手の分析として「担い手である市民とは」何かということで役割論があって、その上で計画を推進していくために大きく3つの事業を出しています。この中で達成できたものもあれば、未達成ではないけれどもいま進行中のものもある。何度もいっていますが現行の計画と違う点としては、はげの美術館があり、ホールがあるということです。そこには学芸員とか専門家の人もいて、前の計画ではアートフル・アクションが作られていく中でNPOを中心に進めたわけですが、今回の場合には、ホールや美術館もありますので、そことの連携、学校との活動も広がってきていることがあると思います。それは文化的コモンズの構成要素として、前回の計画にあがっているものを、

付け加えたり発展するみたいなことを議論をした方がまとめやすいんじゃないかなと思うんです。3次元は面白いんですが、縦軸と横軸にこだわっていると話が空転するんじゃないかなという気がしました。

【大澤委員長】必ずしもこの図を埋めることが今日の議論の目的じゃなくて、考え方や小金井市ならではの特徴を踏まえながら具体的なことを書けるかということやってきたんですが、少し考え方を変えて、現行の計画の中で実現したことや継続していきたい大事なことを次の計画の中にどう位置付けて行ったり、どう膨らませていくか、課題を克服するかという観点で議論を変えようかなと思いました。

【桑谷委員】そこに行く前に、みなさんと確認したいことがあります。社会包摂という言葉の中には多面的で領域が広い言葉が使われていると思うんですが（1）の文化芸術の範囲のところに、文化芸術だけではなく、その他の文化があるんじゃないかなと思いますし、芸術文化ともうひとつの文化がないと僕としては合点がいかないところがあります。社会包摂なんかにかかれていない領域以外の振興にかかれていないことは、芸術文化ではないと思うんですね。

もうひとつ確認したいのが、社会包摂という枠の中で弱者に対する考えが議論されていないということがあります。文化芸術基本法のあたりから議論されている中では、社会包摂は確かに弱者をどう扱うかという議論なんですけれど、それ以前に起きた問題はどうでしょう。広島の実験者とか、水俣病やハンセン病とか、社会包摂という言葉でとらえきれないものは入れないのでいいのでしょうか。社会包摂の考え方があまりにも行政よりの考え方であって、僕たちは芸術文化を語る時、もっと広い範囲で社会包摂を考えなければと思っています。そういう意味では、社会包摂という言葉ではとらえ切れないと思っていますし、社会包摂という言葉で10年先を見込んでいくのではなく、もう少し大きくとらえて、人間の尊厳と他者との交流みたいなことでくくって行ったときに、その中で社会包摂を考えていければと思っています。

【大澤委員長】文化芸術振興を起点にしているけれど、文化芸術の捉え方そのものも拡張していますし、桑谷さんのおはなしでいくと芸術文化とは別の文化を積極的にうたっていくべきだ、共通認識を持つべきだというご意見だと思うんですね。また文化芸術を起点に置きながら、社会包摂であったり市民自治であったり、その概念自体も拡張していくと思うんです。文化芸術振興の計画なんだということは忘れてはいけない気がして、なるべくポイントを得た言葉で共通認識をもつ努力も必要かと思います。2日間の間では風呂敷を広げた議論があってもいいんじゃないかなと思うので、桑谷さんがおっしゃった文化芸術の捉え方、外側になるような文化を考えたり、社会包摂のイメージを議論したいと思うんですが、いかがでしょうか。

【水津委員】市民として文化芸術をどうとらえるかという時に、小金井市がこれだけ立派な計画があっても市民意識として文化が豊かなまちだと思える状況がないと思っています。いろいろな人が文化芸術で豊かになれるとか、社会包摂を担えるとか、みんな認識できるような状況を推進することが目的なんだと市民としては思うんです。それをどうしていくか、そこがすごく大事なことだなと思っています。

先ほどあった、まちのなかにたくさん楽しいことがつくれるようなものをつくっていくべきだと思うので、それを後押しできる、中間支援とかコーディネイターの組織を作ればいいのかと思っています。実際にやるだけじゃなくてやる人たちを支援するとか、やっているものをつなげていくという状況が生まれればいいのかと思っています。宮地楽器ホールと小金井こらぼは一緒に活動しているんですが、こういう催しをすとなつたときに、相談してみようということがどんどん出てきていて、一緒にやる中でまちの中で広げることができる、そういうことが大事なんだ、ということを組み込めたらいいのかと思います。

【大澤委員長】水津さんのお話の中にも、まちのなかで色々な面白いことが起きているということは、芸術文化を広げていろいろな文化が生まれるということについては共通していると思いました。

【野澤委員】今までの話を聞いていて、ひとつひとつの言葉をみなさん大事にして計画をされているのだからって思った時に、社会包摂とか社会教育とか、市民協働とかって、いろいろな意味合いを持つのかなと聞いていて思っていました。いろいろな人がいろいろな意見を持っている中で、ひとつのものを細かく具体的にまとめるのはすごく難しいですね。

誰かがおっしゃっていたと思うのですが、目標とかひとつのキーワードみたいな言葉を入れていき、共通認識とか、ひとつの想いが伝わって行けばいいのかと思っていました。具体的にどういうことをしたらいいのか思いつかないですが、言葉をチョイスするのが難しいので、キーワードで作って行くといいのかなと思いました。

【大澤委員長】ありがとうございます。議論をして計画をつくる時は、選択することばの定義が必要になります。言葉に対して具体的に解説を加えていったりするとき、その言葉に対する解釈は人それぞれで広がりがあるわけですが、目標を掲げること、目的を見誤らなければ進むべき方向は見えてくるという気もしました。

【小林勉委員】一概にことばをひとつにまとめるのは難しいなということを思いながら聞いていました。ひとつの考えで小金井市民全員が同じ方向を向くとは思えない感じもしています。学校に歌いに行ったりするとか、小金井市のどこかに誰でも弾けるピアノがあるとか、誰でも演じてもいいよとか、イベントに参加する方向ではなく市民が勝手にできる、絵を描ける、演じられるということがあってもいいのかなと思って話を聞かせていただきました。

【福沢委員】チャットでメッセージを共有してもらえればと思います。

【大澤委員長】オンライン会議は3回目ですね。不慣れではありますが、こういう技術によって可能になるコミュニケーションもあるのでしょうか。10年の計画づくりということを考えると、こういう技術がもしあるとしたら、こんなことまで可能になるということ、イメージとしてはボールを遠くに投げるような気持ちでいたいと思っています。こういう技術や課題が出てくるんじゃないかってことをイメージした上

で、文化芸術の振興を考えていきたいです。

【伊藤委員】重要な問題を指摘していきたい。まずは計画のベースは条例なんです。条例も含め、小金井市では「文化芸術」ではなく「芸術文化」という言葉を選んでいきます。定義が曖昧ですから、どちらの方がフィットするか考えると、芸術文化という方が狭いイメージが強いです。限界芸術も含めたもうひとつの文化を考えていくと、文化芸術の方がニュアンスが近いのかなという気がしています。条例改正を視野に置くのか置かないかも大事なんですね。

そういう意味でも条例を見直してみたいんですが、条例改正は視野に置かないにしても、現在の計画で達成できていないことがあります。条例では計画を作るということが書かれていて、いまその第2期の計画を策定中です。推進機関の設置はできなかったんですが、中間支援組織のような広い形で形成できてきているという気がします。あるいは、市民の中で活動している人が参加して。いずれにしても新しい計画では推進機関のイメージは提示しないといけない気がしました。

また、芸術文化活動施設の運営では、宮地楽器ホールやはげの森美術館の運営の話があるわけで、補っていく必要があると思います。市の役割のところ「必要な財政上の措置を講じる」という部分に関しても、市は潤沢に使ってきたかどうかはやや疑問を感じています。財政措置だけでできるのかということそれも難しいので、市民ファンドを作るべきじゃないでしょうか。推進機関・ファンド・施設の連携をしていくための、アーツカウンシルという大きくなりますけど、協議会的なものがコアになってお金の問題、人の問題、ノウハウを集約していく。10年後にできて活動しているというイメージを持って、そのために、いま何をやらなきゃいけないのか、事業計画の柱を考えるとということにしたらどうかという気がしています。

【大澤委員長】条例上に出てくる芸術文化という言葉と、国の文化芸術振興基本法という中でも文化芸術ということを使用していることがさまざまところでも混乱と言うか曖昧になっている部分もあるんですが、あらためて小林真理さんがいる時に、芸術文化ということばを条例に選択した経緯や趣旨を説明していただけるといいなと思います。条例改正は手続きが必要になっていくものですし、計画の策定と条例の変更を同時にやっていくのは難しいと思います。条例と言葉の整合性であったり、条例で理解している芸術文化に加えて、計画の中で条例を具体化するなかで、定義や認識について、考え方のところで述べておく必要があると思います。

【事務局・鈴木課長】先ほど伊藤先生から計画の根本は条例という話がでました。条例のベースにあるのは、国の文化芸術振興基本法にあると思っています。2017年に文化芸術基本法になって、社会包摂の考え方が明確に示されていると思います。条例改正していこうという考えは持っていませんが、必要性が議論されるのであれば、対応を考えていく必要があると思います。今後の計画ということで、基本は条例や、文化芸術基本法の考え方から大きく外れることは難しいだろうと思っています。あまり私の立場でこうしろとお話しするのは適当ではないかと思っています。それとは別の文化、より広がりのある文化を位置付けましょうということはあるんじゃないかなと思います。

(休憩)

【大澤委員長】さきほど議論の方向性というか、枠組みにこだわりすぎると議論が空転するんじゃないかという提案から有意義なご提案をいただけたと思っています。事務局からそれを整理してまとめてもらってもいいと思います。

【事務局・小川】協働・教育・包摂の話をしていたとき、市民の意識の話がありました。また、市民が主体的にやらないといけないという話と行政が担うべきところの話がでてきたと思うんですね。これを説明申し上げます。皆さんからでてきた言葉を書いているだけですが、最初の方で、作る人ささえるとか、一緒にやるとやりやすくなるというのが協働の本質にあると思いました。野澤さんの中にもあった言葉の選び方や、解釈の多義性も大事ですし、ファンドの設立やアーツカウンシル的なものの想定も出てきましたね。学校以外にも子どもたちはいろんな場所にいるんだということも出ていました。

【大澤委員長】事務局がみなさんの意見を収集しながら、骨組み自体にこだわりすぎると、拡散してしまうなということを感じたところです。伊藤さんのさっきの休憩前の推進機関の話は、第3章のこれからの時間軸のつながり、展開発展していくところにもかかわってくるという気がしていました。文化芸術振興ということに地に足をつけて議論したいなと思っていますが、事務局からこの部分でご意見やアイデアいただけませんかということがあればお願いします。

【事務局・小川】この先、さらに2章を超えて3章の話はできていないんですよ。この先10年を視野に入れたものにしていく話では、文化や芸術を基盤にして公共性ということに向けてどうしていくのか、夢の話をどこかでできればいいなと思っています。ただ茫洋としたものなので、10年後20年後に小金井の文化芸術がどんなものになっていけばいいのかをお話しできればと思います。

【大澤委員長】10年間を視野に入れた時間軸での成長の仕方を議論の中で具体化できればと思います。夢なので現実的なことについてとらわれずに語ればいいのかという気がします。小金井がどんな芸術文化のまちになればいいのかということも、もう少し語れるといいのかなという気がします。

【水津委員】夢はまちじゅうにいろんな文化に触れられるものがあることなんですね。それが最大の目的なので、そのために何が必要かということをお自分の中では考えています。具体的なことにするとチープなので抽象的ですけど、誰もが文化芸術を享受できたり体験できたりする環境づくりが目的になるといいと思います。例えば、1週間なり2週間なり、テーマを決めてひとつのものをみんなで共有できるような遊び方、伝統芸能がいろんな場所で体験できる、まちの中の児童館や幼稚園でいろいろなことを展開している1週間があって、それがいろんなテーマごとにあってそれに触れられる機会があるようなことがやってみたいと思うことの一つです。

【小林勉委員】一市民としては、お金を払って機会を作らなきゃいけないイベント以外に、自由にできる場所があったらいいというのがひとつです。自分が高校生の時、大分県で独り暮らししていました。別府市では世界的なピアニストの名を冠したアルゲリッチ音楽祭をやるんです。若い人たちが演奏したり、プロが演奏したり、花火をあげたり。駅前に良いホールがあるので、市をあげて音楽祭をやったら楽しいのかなという気がしています。

【野澤委員】私も芸術とかが身近なものであって、何かに参加しようとアクションを起こせなくても、身近にあったらいいなと思うのがひとつです。また、自分自身が小さい頃に芸術に親しんでこなかったのもうちょっと小さい子にもアーティストとかそういう人とつながる機会があったら、小さい頃からアーティストなどの本物を聞いて育つのと、何にも触れないで育つのは違うなって気がしたので、そういうチャンスが小金井市どこにでもあるような場所だったら楽しいと思いました。

【西村委員】文化芸術を通した、気づきの糸口が転がっているまちというか、まちなかに居て、コンサートのようなものもあれば、街の中にある看板やその下のタイルにもなんかあるんじゃないか、そういうドキドキと楽しく過ごせるものが文化芸術にもあるんじゃないかなと思います。問題を共有したり価値を更新したら、価値が揺さぶられる、そういう機会が大きいものも小さいものもある。そういうことがいろんなところに散らばっているといいなと思っています。学校の立場からすると、これまで学校は社会とのつながりの断絶があったんですが、そこと繋がって行けるようなアクションが必要だと思っています。つながりの場所、機会がより広がるのはこれからの大きな流れですし、そこを期待しています。大きいお祭りも良いですし、小さいまちなか発見みたいなこともそうですし、さまざまなものがあるといいなというのが期待しているところです。

【大澤委員長】学校と社会の中で、事務局をやっているSTスポット横浜は、横浜市と協働しているわけですが、STスポットと横浜市の協働は、どんな風に整えられていて、それが小金井で可能なのかっていう話がありますか。

【事務局・小川】はい、ありがとうございます。私たちのお話の前に、福沢さんがチャットにコメントをさせていただいているので読ませていただきたいと思います。福沢委員のコメントです。「小金井に居る方で、有名な方はたくさんおられる。そういう人の演奏を聞いたり、見たりしたい。駅に降りただけで、文化や芸術感の匂いがするまちなかにしたい」。

続いて、大澤委員長から意見を求められている、STスポット横浜ですが、アートフル・アクションの動きも参照しながら活動してきまして、行政と協働で事業をやっていくことを大事に考えていました。行政を変えようと思ってこうしろああしろといっても変わらないんですね。その中で少しの隙をついてでも、行政を巻き込んでやったということを何年かやっていく中で、こういう仕組みがとれるんじゃないかとか、まず思っていたことを形にして、行政を巻き込んで少しずつお金がつく仕組みを作

り、パイロットプログラムから本格プログラムに移行して別の課題が出てきたときも共有し巻き込んで、ということ意識的に横浜ではやっています。最初は劇場をやっていて、それが学校にひろがり、学校が地域にひろがり、地域が福祉分野にひろがりということで少しずつやってきているんです。同じことが小金井でも起こっていると思うんですね。10年後の夢の話ということになったときに、どんどん行政に任せようということはどううまくいかないんじゃないかという気がしています。どんどん民間が自由にできるような、お金のこともそうだし、人的な体制も含めて、もっといろんな主体が小金井にはいっぱいあると思いますし、そういったところをこの先どうやって支援する体制をつくるかが大事かと思っています。

【西村委員】小金井がなさっていることが私わかっていていいわけではないですが、学校の美術の教員では研究会をやっているんですね。そういうところから連携をはじめるのもいいんじゃないかと思うんですね。港区の美術館・博物館の研究会に関わっていると、小中学校のなかで面白い先生や熱量が多い先生がいて、面白いことをしたいという人から先行事例が出ていくと地域の人学校に関わり出すんです。周りの人たちとか校長も関わったらどうかということで、美術館とか小学校の交流が始まっています。アーティストの方との活動が見えてくる、めぼしい方たちと小さなことから始めていくということからできたらいいのかなということをお話を聞きながら感じました。1年、2年ではなかなか難しいかもしれないですけど、関係を作る中でとっかかりを作って行けるかもしれないと思います。

【大澤委員長】教育の方面もそうですし、社会包摂でも今後そういったことが進んでいくんでしょう。私は昨年度、今年度と厚生労働省の調査研究をしているんですが、障害者の芸術文化活動を推進していくうえでどんな計画が必要かということをやっています。この先、国もそうですけど、都道府県や市町村でも、障害者の文化芸術活動が大きな流れになっていると思うんですが、それも仕組みづくりが必要かなと思っています。桑谷委員は、世田谷パブリックシアターや座・高円寺にも関わってきた中で、どうやって地域と劇場をつないできたのか、こういう仕組みがあったらもっと広がるんじゃないかというお話をいただけませんか。

【桑谷委員】社会包摂的な弱者に対する試みは、社会包摂という言葉が無かった時代から僕たちはやっていたという気がします。どこでどういう風になるかはスタッフの意識の高さ、意識の持ちようですね。劇場の運営は、働く人たちの物事の考え方、意思表示に影響すると思うので、いかに良いスタッフと仕事できるチャンスがあるかどうか試されているんじゃないかなと思います。

しつこいようですが、取り上げられてこなかった弱者について、社会包摂を研究されているみなさんが、そのことについては社会包摂とは関わりがないと思っているのか、看過できない事件であったと思っているかどうかを知りたいなと思っています。面白い芸術はレベルが低いんじゃないかなと思っています。芸術文化について、歴史も古い割には芸術について、現代芸術はレベルが低いのではないかなと思っています。それは、これからの取り組み次第だなと思うのですが、行政からの独立性が損なわれているなって思っています。行政からの縛りがある上でそこそこしかいかない

ということが現行の悩みになっています。

【大澤委員長】優秀な劇場のスタッフは、音楽や芸術や美術の専門知識を有しているだけだけでなく、社会との関わりを広げていこうという面においての資質とか知識や技能が大事になっているということをお話になっていると思います。社会包摂という言葉でとらえようとしている対象が、障害者とか外国人だけだけでなく、被爆者とかハンセン病とか、場合によっては国や行政と係争になっている人でも対象であると思っています。弱い立場の人とどう共生していきただけだけでなく、それを包摂していくという方向性の問題じゃないかなと思います。

【桑谷委員】行政の事業用語として社会包摂という用語が使われているイメージが強かったので、そういうことをつかわなくても、僕たちはやってきたんだよという意味では、上位にある、人間の尊厳という他者との共存ということばでいいきれんのではないかなと思ったので、参考のためにお聞きしました。ありがとうございます。

【伊藤委員】桑谷さんの意見に大賛成で、僕も社会包摂という言葉は嫌いです。誰も排除しないということが大事なんですね。包摂というと、そこから入る・入らないという形で議論が起こりますので、包摂と言うことばは嫌なんです。そういう意味で、ベースになっている人間の尊厳、他者の共存というくらいにしてほしいと思っています。

それとは別に、公共性の問題も含めて考えていきたいんですが、メモを見ると真面目なんですね。公共性を考えるときに大事な観点として、まちのにぎわいは大事だと思っているんです。商店街との連携とか、企業やお店の協力が重要になってきます。イベント的なものをやるとかやらないとかではなく、仮に宮地楽器ホールの利点を生かして、年に1回2回でも、ラ・フォル・ジュルネみたいな、イトーヨーカドーや駅や広場や、さまざまな施設を開けて、いたるところで音楽や美術展示があったり、生活文化があったりするような形のものがあったもいいんじゃないかなと思います。

駅を降りて文化の香りがするかどうかは人によって違いますが、文化的な催しがにぎやかであるということは共有できるんじゃないかなと思います。そういう意味では担い手のところに、商店とか民間企業とか商工会とか青年会議所とかそういうことも目を配った方がいいのかなという気がします。そうでないと、伝統芸能だけといったように限られたものになります。祭りとか、地域の中で傳承されてきた交流の場、そういうことを共有していきたいです。あとは公園ですね。小金井の中で一番有名な文化資源、地域資源は、公園です。広場を活用していく仕組みを考えないといけないと思います。

2. その他

今後の進め方について 意見交換等

【大澤委員長】おおむね時間になりそうです。今日これだけ言うておきたいということが無ければ、明日議論の続きができればと思います。一旦ここで今日の議論を終了したいと思います。ありがとうございました。

— 了 —

